



◆其の八十五  
金びかの時代、日本人が輝いていたころ

日本列島では貴金属で全身を飾ることは、歴史上ほとんどありませんでしたが、例外といえるのが古墳時代です。

金の冠、耳飾り、甲冑(かっちゅう)、大刀、履(くつ)。奈良県の藤ノ木古墳からはさまざまな、金で装飾されたモノが見つかっています。奈良県や大阪府にある大王や有力豪族クラスの人たちは、頭のテッペンからつま先まで金びかだったのです。快晴の日の屋外では、さぞまぶしく輝いていたことと思われま

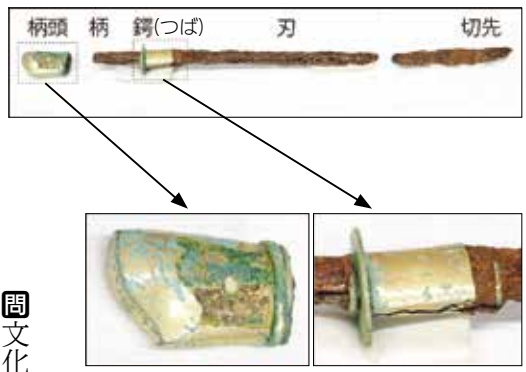
す。身に着けた人物自体が光り輝いて見える金の装飾品は、特別な存在であることを感じさせる、これ以上ない装置であったことでしょう。現代にも通じる「映え(ばえ)」といえます。

この金びかムーブが日本列島に広く波及したことは、全国の古墳から金で装飾を施した大刀や耳飾りなどが出土していることから分かります。もちろん全身を飾れ

るのは大王クラスなどほんの一握りの人たちでしたが、少しでも金びかのものを身に着けようとしていたのです。

「ちくしの」人も例外ではありませんでした。美しが丘団地造成に伴い発掘調査された古墳からは、金で装飾された圭頭大刀(けいとうのたち)が出土しています。

精巧な細工が施された、独特な形の柄頭(圭頭)を見ていると、この大刀を腰に佩(は)き、誇らしげにポーズを決める古墳時代の「ちくしの」人の姿が目には浮かぶようです。今の時代であれば、さぞSNS映えしたことでしょう。



輝きを失わない金銅装圭頭大刀

文化財課

